喪女で王女で勇者の娘

ねこやなぎすばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
喪女で王女で勇者の娘

【Ｎコード】
Ｎ１８５４Ｙ

【作者名】
ねこやなぎすばる

【あらすじ】
異世界から勇者が召還され、よくあるかんじでチートでハーレム的なパーティーで魔王（笑）をフルボッコにしたあと
これまた可愛くて、純粋で周りから愛され体質な逆ハーレム王女と結婚。
それも今は昔

そんな両親のハーレム体質が一欠片も自分に受け継がれてない件について、一体どこに問い合わせればいいのかしら。

一癖も二癖もある家族とその逆ハー&ハーレム体質っぷりにすっかり性格のすれてしまった第一王女メルティア。
そして魔王の脅威がない平和なよであるからこそ、王宮は権力と愛とを奪い合う万魔殿と化す。

彼女は無事に王位につけるのか？

―そして、彼女は誰かを愛せるのだろうか？　―

∴誰こいつと思った時の人物紹介∴（前書き）

話がすすむにつれ続々追加されていきます。
時々作者も名前が思い出せない残念な人々。

∴誰こいつと思った時の人物紹介∴

∴メルティア・ラ・フォッセ・フロル・ディアグレイシス（１７）
↓第一王女で王位継承権第一位。この話の主人公で愛称はメーアこの話の大半が彼女の視点で進んでいる。
そして読んでいて分かるように、所謂お姫様な思考が一欠片もない残念な人。
　考えていることの１０分の１も口にしないので周りからは『寡黙な人』と思われている。

エヴァンナ・ラ・セルシ・フロル・ディアグレイシス（１４）
↓通称青薔薇姫。第二王女。
姉と違いとてもお姫様らしい人
。ちょっと我が儘。自分磨きに余念がなく彼女の親衛隊はイケメンしか入れない。
母の逆ハーレム遺伝子をバッチリ受け継いでいる。

エヴァンズ・ラ　・オムル・ディアグレイシス（１４）
↓第一王子末っ子。
エヴァンナとは双子。
通称白薔薇の君とか白薔薇の王子とか呼ばれてるが所謂腹黒ショタ。
ショタなので女性だけでなく男性も惹きつける恐ろしいショタ。
言わずもがなハーレム体質。

エセル・クラヴァート（１４）
メーア付きの侍女。人見知りで少し口下手。父は男爵。
メーアには三年前から仕えている。

クルベット・フロル・ジャマル（１９）
メーア付きの侍女。
金髪青眼。
ツンとした口調だが残念なことにツンデレではなく小姑属性。
そのせいかお見合い話がこない子爵令嬢。

キヨテル・ハシバ・オムシズ・ディアグレイシス（３５）
↓異世界からきて世界を救った元・勇者でありチートでハーレム属性の人。
日本名に直すと羽柴清輝。
最近娘達が冷たいことに心が折れそうな現国王。

ルサーナリア・ラメイ・フロレン・ディアグレイシス（３１）
↓　ディアグレイシスの元王女で１５年連続『結婚したい女性第一位』
メーア達三人の母だがとても若々しい。
国母となったいまも国の重鎮や中年層に絶大な人気がある。

∴

名前・（旧姓か母方姓略式が多い）・（王族の場合継承順位）・（子爵以上の貴族の場合・未婚女性フロル・既婚女性フロレイ・未婚男性オムル・既婚男性オムシズ）・家名

∴

光の勇者様の伝説

むかし、あるところにうつくしいおひめさまがおりました。
おひめさまはやさしく、くにのみんながおひめさまをだいすきでおひめさまもみんながだいすきでした。

あるひ、おそろしいまおうがあらわれ、おひめさまをむりやりおよめさんにしようとしました。

そのときてんから、ひかりのゆうしゃさまがあらわれ、まおうをやっつけました。

ひかりのゆうしゃさまとおひめさまはおたがいをひとめみてすきになりました。

おうじょさまとゆうしゃさまはけっこんして、かわいいおうじょさまがうまれました。

ですが、ゆうしゃさまはかみさまのおぼしめしでてんへかえらなくなりませんでした。

せかいはふかいかなしみにつつまれました。

ですが、いつのひかゆうしゃさまはこのちにもどられ、ふたたびこのせかいをおすくいになってくださるでしょう。

『よくわかるゆうしゃさま：著マーロウ・グレース』

朝は新聞よむでしょ？

第一王女のメーアの朝はテラスにテーブルを引っ張り出す事から始まる。

寝間着にガウン。

ただ長く裾はふんだんにレースで覆われ、首元まで覆う寝間着に明るいクリーム色のプリーツの入ったガウンは一見遠目から見ると、簡易なドレスを着ているように見える。

似たような形の寝間着とガウンを使い回せば朝からコルセットを閉めずにすむという、なんちゃって素敵アイディアである。

朝食はテラスでとるメーアだが、彼女の部屋は城の四階にあるのでめったにみあげられることもなく、見られたとしてもなんちゃって寝間着ドレスに気づかれることもない。

間近でみるのなんて自分付きの侍女位だがもはや侍女たちは諦めて何も言ってこない。

テラスにテーブルをセットし、イスを運んで座る。

すがすがしい朝日とみずみずしい緑の香り、をしばし堪能していると、扉をノックする音と朝食を持ってきた侍女の声がしたので入室を許可する。

ゴトゴトとカートに乗せられた朝食をテーブルにセットされるのを見ながら、手渡された今日の新聞を広げる。

「ふーん。」

新聞と言っても縦５０セチン横５０セチンの裏表印刷一枚きりだ、キヨテルタイムズと印刷された新聞には地方の村での祭りの事や、貴族の破局スキャンダル、先日
の王室の行事などなど毒にも薬にもならないがとりあえずチェックするのがメーアの日課である。
ちなみにキヨテルタイムズのキヨテルというのは父の名前で新聞という物も十数年前に父がもたらした『文化』の一つである。
父譲りの漆黒の髪色と母譲りの新緑の目の色、黒く長い髪は癖が強いのかうねりまくり（なんか櫛でとかすのめんどいし、油ぬっとけばいいんじゃない？わざわざカールをかけているかたもいるのだしこれはこれでいいと思う。と侍女に言ったら何故か烈火のごとく泣きながら怒られた。）
そんなに不細工ではないんじゃないかなぁー…と彼女は首を傾げるのだけど、いまだかつて逆ハー現象というものにとんと縁がない。

自分の妹弟の双子のように

青薔薇姫ことエヴァンナと白薔薇王子ことエヴァンズ。

歩く逆ハー＆ハーレム体質

どうして双子だからといって似たような名前つけたし。

しかもエヴァンナとエヴァンズって略しにくいし、両親マジスィーツ（笑）

と、メーアこと第一王女メルティア・ラ・ファッセ・フロル・ディアグレイシスは思った。

ミルクって牛乳でしょ？

メーアは読み終えた新聞をたたみ侍女のエセルに渡す。

エセル・クラヴァート歳は十五歳、小柄な体に足首までである濃紺のワンピースと、染み一つない白いエプロンを纏い、襟にはメーア付きの証である、橙色の荊の刺繍があり、白い髪をきっちりと結い上げ帽子の中に入れている。

朝起きるのは苦ではないんだけど、朝食を食べるまではなんかボーってしてしまう。朝食大事だよ朝食。私は朝からしっかり食べる派。

「今日の朝食は　根菜のポトフとチーズリゾットとカットフルーツです。お飲み物はミルクと紅茶どちらに致しますか？」

「牛乳。」

「畏まりました。」

エセルはちょっと困った顔をしてミルクをピッチャーからグラスに注いでいる。

ミルクを牛乳と言って悪いか

エセルが初めて宮中に上がったのはたしか四年前で　エセルが十一で私が十三の時だったと思う…うん…多分。たしか、うん４年前、４年前４年前の春。

行儀見習いのため侍女として大勢の貴族の子女たちと大広間で謁見したのだが、１５や１７の子女達の中で１１のエセルは酷く目立っていた。

（必死だなぁ。）

とか、欠伸をかみ殺しながら彼女達を観察する。

彼女達の目当ては見目麗しくかつ、世界を救った勇者である父キヨテルと、その膝の上で父の上着のボタンを超弄くりまわしている、王子エヴァンズ、母で王妃ルサーナリア、その膝の上で大人しく座っているエヴァンナと言ったところだろうか。

（あ、ボタン取れた。）

父のボタンを弄くり回していたエヴァンズはとうとう父の上着のボタンを取ってしまった。父は気付いてるのか気付いてないのか…心なしか笑顔が引きつってるような気もする。そしてそのボタンを明後日の方向に放り投げる弟。

壇上の家族に自分達を超アピる令嬢達とそれを観察する私。

そして、エセルの番になって、震えながら彼女は淑女の礼をとると、出身や家柄などの出自をたどたどしく言うとそのまま俯いて黙り込んでしまった。

侍女頭のボーマンが何か尋ねても、俯いたままで、微かに震えて、周りからはクスクスと令嬢達が忍び笑いを漏らしている。

イラっ

それは、決して正義感とか私が助けてあげなくちゃ！みたいな気持ちから出たものではない。

「なら私付きの侍女になりなさい。王家に忠誠を誓い仕えるのであれば、多くの言葉は不要です。」

煩いのよりは静かな方がいいし。

私の一言に気味が悪いほど広間が静まり返ったのを今も覚えている。

私の為に争わないで？

まがりにもメーアはこの国の第一王女であり、第一王位継承者である。

そんな彼女の周囲侍女、侍従の評価は

『思慮深く、寡黙な姫君。』

担当の教師の評価は

『不可はないが飛び抜けた良もなく…』

国の重心達の評価は

『暗君にはならないだろうが、名君とは呼ばばれないだろう。』

という、詰まるところ

『口数がすくないがまあまあ平凡な王になるんじゃない？』

といったところだ。

取り立てて何かが優れているわけではないけど、悪いところも見

当たらない。

毒にも薬にもならない。

そのうち即位して、周囲の国から夫を貰っって…

そんな周囲の評価に本人は

『ふーん』

とかいったとか言わないとか。

∴

「ねぇ、お姉様聞いてらっしゃるの？」

キャンキャンと子犬の様に最近とみにうるさくなってきた妹が何かのたまっているが、どうせどうでもいいことなので、私は聞き流しながら書類に判子をを押したり、奏上された意見書に目を通す。

「聞いてない。」

「そこは嘘でも『聴いてるわ、可愛いエヴァンナ』と仰って下さいな！」

あー…自分が暇だからって絡まないで欲しい。むしろ暇ならこの書類を手伝って欲しいじぇ。

「私、自分に嘘はつかない主義なの。」

しっかり朝食を食べた後は、昼食の前に一仕事。曲がりなりにも王位継承者なのだ。

（なんか最近王都の人口増加による職にあぶれ率が…あぶれる→お金ない→犯罪増える→治安悪化→…）

「もー！お姉様ったら！！！」

話を聞いてくれない事にイライラしたのか、エヴァンナが大声を出すもんだからこっちは耳キーンと来た！

てかそんなお前に私がイラっ☆っとくるよ。

「……分かったわエヴァンナ」

私は軽く溜め息を漏らし顔を上げた。

そして意外と近くにあった妹と間近で顔を突き合わせる事になる。

私の三つ年下の妹でありエヴァンズの双子の姉であるエヴァンナ。

腰まである髪は少し灰色がかった金髪で母譲り。
姉の私とは違い何の癖もなく真っ直ぐでサラサラした髪はきっとクシが絡まって外す為に金鎚でクシを破壊するなんてことは人生で一度も経験したことないんだろバカヤロー。

（因みにわたしは三回ほどある。）

黒い瞳は父譲り、零れそうな大きな瞳は南海で取れる黒真珠の様に神秘的で吸い込まれそう！と、もっぱら周囲の男共は馬鹿なことを言っているが、目に入れて痛くないほど可愛いのは孫だけだ。（孫いないけど）お前らが入ってどうする。

……あれ？なんかちがう。

ともあれサラサラ金髪に黒真珠の瞳のエヴァンナは母の若い頃に瓜二つで、（母は今だって若々しく美しいけど！）母の若い頃をしる重鎮から仕官したばかりの従騎士まで、彼女の貴色と花の紋になぞらえ青薔薇姫と呼ぶ。

（貴色が青だから青薔薇姫…黒真珠の瞳なんだから黒真珠姫でよくね？）

因みに姉であるメーアの貴色は橙色で紋は荊、末っ子で弟のエヴァンズの貴色は白で紋は葉である。
文字通り蝶よ花と甘やかされたエヴァンナはちょっと…いやかなり？我が儘に育ったと思う。

だが誰かを傷つけるほど愚かではない…と、思う。多分。かなりイラっと来るけど。

「ですからね、私の護衛騎士達と親衛隊が何時も喧嘩ばかりして、この間護衛騎士のネルが怪我してしまったの！どうか彼らが私の為に争わないようお姉様がとりなしていただけません？」

眉根を寄せ瞳は悲しそうに潤み、こちらを見つめるエヴァンナこのいかにも

「私を助けられるのは貴方だけなの！」

みたいなかんじがなんかもう、駄目なんだと思う。

「俺が姫を守る！」

みたいな風にかき立てられちゃうんだろうなぁ…。

私にはさっぱり分からないけど。

因みに護衛騎士というのは騎士の団の中から王族個人につけられるもので、そこから更に腕に立つものや忠義の厚いものが指名され親衛隊に入ることを許される。

エヴァンナの護衛騎士は親衛隊はいりたさに年度末までローテーションが決まってるっていうんだから驚きである。

しかもエヴァンナは面食いなので親衛隊はイケメン揃いでいである。

滅べ！

個人的に意見をのべれば互いに傷付けあって滅べばいいと思うが、その争い合ってる馬鹿男共は護衛騎士と親衛隊はまがりにも騎士で

あり、国の仕官、有事の際の国の守りでありそれよりは何よりも国民の血税で食っているのである。

マジ仕事しろ馬鹿共。あぁ…このままほっといてねずみ算式に被害が増えて行くのもめんどいなぁ…。

∴

後日こんな張り紙が騎士の詰め所や廊下に張り出された。

【第一王女メルティアの名において城敷地内での騎士らの許可無き私闘及びを禁ずる。】

勇者は雑草を食べないでしょ？

んー！

と、背伸びしたら肩がバキバキ鳴った。

ちょっと鬱なメルティア17歳。

あれから、エヴァンナが一緒に是非一緒に昼食を食べたいとかぬかしよるので、超丁重にお断りした。

なんか即位したあと外交とかうまくやっていけそうな気がする。

∴

「ちゃっちゃと食べて片付けさせて下さいませ。」

肩まである金髪、ツンとした口調だが残念なことにクルベットはツンデレではない。

ただの小姑である。

「本日の昼食はクヴァ鳥のソテーに茹でチー豆とパンです。お飲み物はミルクとお茶どちらになさいます？」

「牛乳。」

私は断然牛乳推しである。

「ミルクとお茶どちらになさいます？」

「牛乳。」

「……。」

クルベットの無言の圧力。

「牛乳。」

国家権力は侍女の圧力に屈しないことをここに証明しようと思う。

パンを半分に割り、中に穴をあけそこに茹でチー豆を詰める。

ふわふわで小麦粉独特の甘味と塩とスパイスで煮込んだチー豆の少し固めの2つの食感の違いを口のなかで楽しむ。

「お行儀が悪いですわよ姫様！」

「誰も見てないわよ。」

「私（わたくし）が見てますわ！」

キリキリとつり上がるクルベットの目尻。

たまに、クルベットがツンデレだったらいいのに、と思う。

続いてクヴァ鶏のソテーを一口大の大きさに切り分け食す。

淡泊な肉をバターでソテーし、甘辛くこくのあるソースとさっぱりした酸味のある2種類のソースで食べる。

因みにチー豆はそこら辺の土手に、クヴァ鶏はそこら辺に飛んでる鳥だ。

なんで一国の王族である自分がそんなものを食べているかと言うと、

『チー豆とクヴァ鶏は父さんの命綱だったんだよね。チー豆は乾かして保存がきくし、クヴァ鶏はそこら中にいるし。』

という、元勇者である父キヨテルのせいである。

父曰わく、『雑草でもいいから食べたいと思ったとき、森の聖霊がこれ食べれるって教えてくれてね～。そこらへんに生えてるから食べ放題だった。クヴァ鶏はそこらへんにいるし試しに焼いて食べたらおいしくて。』

その話を西国の大使との晩餐会で大使のあの悲しいようなしょっぱいような瞳…。

（その日のメインはクヴァ鶏のローストセイント・ライト・ブレイブ風。父の名前が清く照らすと言う意味から命名されたこの国の定番メインだ。）

当時チー豆もクヴァ鶏も食料として認識されてなかったため、『終末の災禍』のおり、村や街にチー豆とクヴァ鶏を食用として広めたのも父だった。

なので父が魔王を倒したあと父にあやかり、チー豆とクヴァ鶏は国内で爆発的に生産、養殖、品質改良が進みいまではブランド品種まである。

でもブランドチー豆とたまに父が土手でむしってくるチー豆の違いがよくわからない。

父は元々は『ニホン』というところに住んでいたらしい。らしい、らしい、というのは、その『ニホン』という国がここと違う異世

界にあって、１８年前『終末の災禍』と呼ばれる、世界が滅びかけるという大変な災いがあった。

誰もが絶望するなか光と共にこの世界に招かれた父は、『チート』という能力で魔王を倒したのだという。

その『チート』というのがどんな能力で『魔王』とはどんな恐ろしい魔物だったのか父に問うたこてがあったけども、

『僕の愛しいメーア、それはいずれメーアが女王となったとき否応にも知ることになるだろうね。……だからねメーア、急いで大人にならず、いつまでも稚いメーアでいてほしい。』

僕も長く王でいられるように、健康にきをつけるね？と微笑む父を見て、私はよくわからない、明かりのない部屋を一人で覗き込んだような薄ら寒さを感じたのを覚えている。

私はいずれ父の座する場所へ座る事になる。

でも、それが決して華やかで輝かしいばかりでない事も知っている。

その日が待ち遠しいような、でも来てほしくないような、そんな複雑な感情を抱いてたけど、去年侍女をやめたセリーヌが辞める直前

『なんかぁ、なんかもう来て欲しいけどぉ、きてほしくないっていぅかぁ…複雑？』

と良く漏らしていた。

え？何って？

彼女、マリッジ・ブルーだったらしいのよね。

この間今度子どもが産まれるとか手紙が来たけど。チー豆を樽で送ってくるのやめてほしい。しばらくお昼チー豆でまくるから。

可愛いは正義じゃないでしょ？

午前の政務を終え、今日は午後から授業もない上、良い天気だし、のんびり騎士達の修練場の横の道を抜け厩付近を散歩。

ひひ―ん。ぶるぶる。

良く貴族は馬は優雅な生き物で好ましいっていうけど、私は、馬のあの

『俺達走りにマジ命かけてるんで！』

って感じでブルブルヒンヒン言いながら歯をむき出しにして走ってるのが好きだ。

あいつらいつもマジなんだもん、ういやつらめ。

どこかの馬鹿共も馬車馬のように働けばいいのに…。

溜め息しか出ない。

しばらく柵に寄りかかり放牧されてる馬を眺めていた。

青臭い芝生の匂いとかマジ癒やしだわぁ。

執務室紙の匂いしかしないし、こんど過敏に草でも生けようと思う。

花はすぐ萎れるし。

「これはこれは姉上、ご機嫌よう。」

この世で私を姉とのたまうのは世界に二人しかいない。
さらに絞ると弟は一人しかいない。
弟となると奴しかいない訳だが

「まぁ……、エヴァンズ、ご機嫌よう。」

振り返るとエヴァンズとその後ろに数人の騎士と侍女が跪いている。

エヴァンズはこの国の第一王子エだ。

3年下妹のエヴァンナとは双子で末っ子で幼い頃は良く追いかけ回して泣かせたものだ、私が追いかけまわさなくなってからはエヴァンナに追いかけまわされ今は侍従やら護衛やらをぞろぞろ引き連れわざわざ自分を追いかけさせるとか我が弟ながら性癖を心配してしまう。

エヴァンナとエヴァンズは双子なので顔は母の若い頃に瓜二つ。灰色ががった淡い金髪は肩のあたりで切りそろえられ、父譲りの黒い瞳は男とはいえ思えないほど大きくクリクリしている。
華奢でほとんど少女とみまごうばかりのその外見のせいか、老若男女問わず人気がある。

「奇遇ですね姉上、馬を見てらしたのですか？お暇なんですか？ならこれから僕と遠乗りでもいかがですか？」

「だがことわ「うわぁ、嬉しいなぁ！姉上と遠乗りとか久しぶりで

すよね？」

エヴァンナよりよっぽど扱いづらいよこの弟。

そして風に吹かれてなびく髪のサラサラ感が超憎い。

「というわけだからサエラ、馬番に鞍を着けるよう行ってきて。」

「はい、我が君。」

サエラと呼ばれた女騎士は立ち上がると厩の方へ入っていった。
真紅の髪を肩で切りそろえ、きりっとしたかんじの如何にも「負けず嫌い」です、って感じだ。
あ、キュッと締まったいい尻。

てか…ワー…我が君だって、我が君だって、何それ超はずい。
その呼ばせ方はちょっと背伸びしすぎなんじゃない？
いまはまだ可愛いから良いけど、あと2、3年してムキムキマッチョにでもなってから呼ばせなさいよ。

とエヴァンズを凝視するがエヴァンズは何を考えてるのかニコニコしてるし。

イラっ☆っとくる。

そして、お付きの人々の視線が痛い。
侍女が三人に騎士が二人…

何故そんな親の敵を見るような目で見るし。

特に睨みつけるように凝視してくるのは、短く刈り上げた黒い短髪に筋肉モリモリな男。日に焼けた肌にエヴァンズの貴色である白の騎士服を纏う……

……

…名前が思い出せないとか言えない。

とにかくエヴァンズと一心同体のごとく何時も一緒にいる親衛隊の騎士。胸に銀糸で葉の刺繍があるから親衛隊長だろう。

貴色の騎士服を纏えるのは親衛隊。襟には貴紋の刺繍。そして親衛隊長は命を捧げると言う意味で左胸に貴紋の刺繍。

白とか青なら良いんだけど、私の貴色橙色なんだよね…橙色とか微妙すぎる。

即位したら絶対貴色変える！

絶対にだ！

馬は悪くないでしょ？

前回のあらすじ。

うわ　おうし　ゅっょい

何を言ってるか良く分からないと思うけど、ありのままに起こった事を話すと。

「ジョセフィンはとっても大人しいんですよ。」

「ふーん。」

仕方なくエヴァンズと城の裏の丘に遠乗りに行くことになったんだけども。

私、エヴァンズ、その騎士三人、エヴァンズの侍女三人

なにこの超アウェーな感じ。

私とエヴァンズが前を併走し後ろから騎士と侍女が付いて来る。

背中に視線が超刺さる。

「お姉様の馬って何て名前ですか？」

「カグヤナデシコ号よ。」

「か…かぐ、な？？」

「カグヤナデシコ号。」

「…素敵なお名前ですね。」

可哀想なモノを見るような目で見られた。

「…ずいぶんと変わったお名前を付けられたのですね。良ければ私達下々の者にも由来をお聴かせ願えませんか？」

私達の会話を聞いていたのか、サエラと言ったか女騎士が話しかけてきた。

……少しだけ面食らってしまった。こんなふうに…いや、邪推しちゃいけないわ、これが嫌味だとか他意があるとか、だが誰も咎める様子がないのでもしかしたらエヴァンズとその従者達はいつもフランクな感じに付き合ってるのかもね！

でもお姉ちゃんはちょっと失望しちゃったけどね！

「カグヤとはおとぎ話にでてくる月から来た絶世の美姫の名前でナデシコと言うのは清く礼儀正しい女性の事です。」

「絶世の美姫ですか。」

サエラの言葉に含みがあるのはきっとワタシノキノセイヨネ？

「お姉様にぴったりですね！」

エヴァンズはニコニコ微笑み返して来るけどなんだろうこの憎しみは。

「ねぇ？みんなもそう思うでしょ？」

エヴァンズは振り返り後ろの侍女達に問いかける。

「…えっ、そうですね？」

「私も王女殿下によくお似合いだと思いますわ。」

「えぇ！私もそう思います。」

侍女達の頬がちょっと薔薇色なのは、絶対馬に乗ってる上下運動のせいじゃないね！

このショタコン共！

彼女らが私に似合うと答えたのも、「メルティア様には不相応な名前でも否定などして無邪気なエヴァンズ様を悲しませてはいけないわ！」

ってところかしら。

てか、カグヤナデシコって言うのは馬の名前であって私の名前ではないのだけどね！

というか私この国の第一王女で時期女王様何ですけど？

アウェー私超アウェー。

てか、つけたの私じゃないんだけどね！

カグヤもナデシコも父キヨテルが付けたんだけどね！

『ほら、可愛い馬だろう？メーアもお姫様なんだし、お姫様っぽい名前がいいと思ったんだよね。』

私も、由来はどうかとおもったけど付けられた本人（馬）が満更でもないって顔してたから、本人（馬）の好きにさせただけなんだからねっ！

にしても胸くそ悪い。

「エヴァンズ？風も出てきたし日が暮れる前に戻りましょう？。」

「はい、お姉様。」

引き返そうと、カグヤナデシコの腹を軽く蹴って方向転換させようとしたとき、

ズッ

右足が空を蹴った。

「っ！」

一瞬、血がざあっと引いた。
手綱を強くひき左を力一杯踏ん張る。
方向転換しようと手綱を短めに持ち替えててよかった。

「ヒヒーン」

急に手綱を引いたからこちらもびっりしたであろうカグヤナデシコ。

「どうどう…ごめんね？ちょっとびっくりしたね。」

カグヤナデシコの鬣を優しくなでる。

「大丈夫ですかお姉様？」

「ええ、大事ありません。」

声をかけてきたエヴァンズに平静を装って返事をする。
全然平気じゃない。心臓爆発する。
でも、そんなことありませんよと、取り澄ます。

「……どうやら鐙（あぶみ）の金具が外れてしまったみたいね。」

見ると先程まで右足を乗せてた足場が無かった。

「鐙が……お姉様宜しければ帰りは僕と一緒に乗りませんか？」

「いいえ、大丈夫よ。それに馬に乗るときは道具の点検は自分でしなくてはならないもの。これは私の怠慢の結果だわ。」

厩に入った時にはカグヤナデシコにはもう鞍がついていた。
これは私の完全なる怠慢であり

――敗北だ。

腹帯は一応確認したんだけど、まさか鐙が外れるとか予想外。

くそぅ。まじで悔しい。

でもそんな時ほど顔を上げ、胸を張り、背筋を伸ばす。

私なーんも傷一ついてませんよ顔するのが一番いいのだ。

馬から見た視界は高く広い。

荒れ狂う感情はとりあえず別の場所に一時保管し、夕食のことを考える。

…牛乳牛乳牛乳牛乳牛乳…

ミルク何ていう軟弱な呼び方は認めないわ！断じて！

「今日の夕食はなをでしょうね？」

夕食時には絶対牛乳を飲もうと心に決めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1854y/

喪女で王女で勇者の娘

2011年11月5日03時20分発行